

# PRESS RELEASE

新国立劇場 2025/2026シーズン 演劇

いま、ここに——[2]

## エンドゲーム

[フルオーディションVol.8]

小川絵梨子芸術監督 最終シーズンのフルオーディション企画は、満を持して自らが演出！  
挑むのは、ノーベル賞作家サミュエル・ベケットの傑作『エンドゲーム』！  
「終焉」のときを待つ登場人物たち…、人間とは、生きること、とは——



(左から)近江谷太朗、佐藤直子、田中英樹、中山求一郎



翻訳  
岡室美奈子



演出  
小川絵梨子

2026年5月20日(水)～31日(日) 新国立劇場 小劇場

プレビュー公演:2026年5月15日(金)～16日(土)

2026年3月20日(金・祝)10:00～ 一般発売開始！

【写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ】

新国立劇場 制作部演劇 広報担当 杉田亜樹

TEL: 03-5352-5738 FAX: 03-5352-5737

E-mail: sugita\_a8863@nntt.jac.go.jp

〒151-0071 東京都渋谷区本町 1-1-1

 新国立劇場  
NEW NATIONAL THEATRE TOKYO

## 8年間続いた〈フルオーディション企画〉のラストを飾る作品 1,016 通の応募者の中から選ばれた 4 名のキャストと、 演出の小川絵梨子が「終焉」の世界における“希望”を描く——！

小川絵梨子芸術監督が、その就任とともに打ち出した支柱の一つ、すべての出演者をオーディションで決定する〈フルオーディション企画〉。8 年間で累計 1 万 3 千通を超える応募があった本シリーズも、小川絵梨子監督の任期満了と共に、いよいよラストを迎えます。

任期最後の本企画で、自ら演出も担う小川が選んだのは、1957 年の初演から半世紀以上を経てもなお世界中で上演され続けているサミュエル・ベケットの傑作『エンドゲーム』です。

タイトルの「エンドゲーム」は、チェスの終盤戦を意味しており、駒が少なくなり、逃げ場のない状況を示唆しています。終末的な状況下で、閉じ込められた四人の登場人物の絶望的で繰り返される日常を描いた不条理劇で、ベケット自身は、本作を「自分の作品の中で最も嫌いじゃない作品」と評したと言われています。出口のない状況の中で、彼らは終わりを待ち続けているのか、それとも——。

### ■1,016 名の応募から選ばれた、全員が新国立劇場初出演の 4 名

オーディションは 2025 年 3 月より公募を開始し、1,016 通の応募が寄せられました。書類選考から三次選考まで、約 2 ヶ月に及ぶ審査を経て選ばれたのは、近江谷太郎、佐藤直子、田中英樹、中山求一郎の 4 名。

フルオーディション企画史上最少数となるこの 4 名は、全員が新国立劇場主催公演初出演。「作り手が新しい俳優と、俳優が新しい演出家と、劇場が新しい作り手たちと出会い、作品を立ち上げていく」という本シリーズが掲げてきた理念を体現する結果となりました。

### ■シリーズ企画「いま、ここに——」第二弾として

本作は、小川芸術監督の任期最後のシリーズ企画「いま、ここに——」の第二弾でもあります。変わり続ける世界の中で、いま、ここに生き、小さな希望を見いだしていく 3 つの物語を 2026 年 4 月より 3 カ月連続で上演します。

小川は、『エンドゲーム』について、今まさに終わろうとしているかのように見える荒廃した世界の中で、「終わらせないためにどう生きるか」を探求する物語だと語ります。

4 名のキャストと共に、「終焉」の世界に灯る“希望”を描き出します。どうぞご期待下さい。

### 「フルオーディション企画」の上演歴

	シーズン	演目	演出家	上演時期
Vol.1	2018/2019 シーズン	『かもめ』	鈴木裕美	2019 年 4 月
Vol.2	2020/2021 シーズン	『反応工程』	千葉哲也	2021 年 7 月 ※
Vol.3	2020/2021 シーズン	『斬られの仙太』	上村聡史	2021 年 4 月
Vol.4	2021/2022 シーズン	『イロアセル』	倉持 裕	2021 年 11 月
Vol.5	2022/2023 シーズン	『エンジェルス・イン・アメリカ』	上村聡史	2023 年 4～5 月
Vol.6	2023/2024 シーズン	『東京ローズ』	藤田俊太郎	2023 年 12 月
Vol.7	2024/2025 シーズン	『消えていくなら朝』	蓬萊竜太	2025 年 7 月
Vol.8	2025/2026 シーズン	『エンドゲーム』	小川絵梨子	2026 年 5 月

※『反応工程』は、当初、2020 年 4 月上演予定であったが、コロナ禍での緊急事態宣言の発令のため、公演延期

## あらすじ

家具のない室内。舞台奥に小さな窓が二つ。カーテンは閉じている。壁際にはバケツが二つ、並んで置いてある。古ぼけたシーツを被って車椅子にかけている盲目のハム。もうひとり、クロヴが不自由な足取りで室内をウロついている。どうやら主従関係のようだ。二人はとりとめのない会話を続け、ハムは常にクロヴに文句を言い、怒鳴り散らし、イライラしている。クロヴはたまに外を覗いたりもするのだが、見えるのは殺伐とした風景。お互い、そんな日常に絶望しうんざりしていた。やがて退屈のぎにハムが、バケツの中の人間に話しかける。中にいたのは彼の父親らしい。そしてもうひとは.....。

## 翻訳家・演出家からのコメント

### 翻訳・岡室美奈子コメント

自粛生活を余儀なくされた COVID-19 パンデミックを経て、ウクライナやガザなど世界のいたるところで戦争が起こっている現在、『エンドゲーム』はとてつもなくリアルな作品です。もともと『ゴドーを待ちながら』などベケットの演劇は戦争や災害が起こった土地で上演されてきましたが、『エンドゲーム』は『ゴドー』以上に現在の世界に応答しているように思われます。また、戦争や厄災のみならず介護やヤングケアラーの問題にも直結しています。しかしそうした諸問題を映し出すだけではなく、人間の連帯と孤独、物語の役割など普遍的なテーマをもった深い作品でもあります。新訳では、盲目のハムの語りを大事にし、会話パートと語りのパートの文体を変える工夫をしました。ベケットと言えば、不条理劇＝わけがわからないというイメージが根強くありますが、そうした固定観念を払拭すべく、原文に忠実で、かつ、わかりやすい訳を心がけました。ハムとクロヴの二人の関係の変化がお客様に伝わることを願っています。最後にクロヴがどういう決断をしたのか、想像していただければ幸いです。

### 演出・小川絵梨子コメント

サミュエル・ベケットによる『エンドゲーム』は、1957年に初演されました。描かれている世界は、どうやら『ゴドーを待ちながら』の時代よりもさらに荒廃が進んでおり、人間関係は一層の悪化を見せ、今まさに終わろうとしている世界に見えます。しかし描いているのは「意味を失った世界」や「世界の終わり」という状況だけでなく、「終わらないためにどう生きるか」を探究する物語でもあると思います。

ベケット作品の登場人物たちのように、時間と存在への無力感と対峙しながらも、それでもなお生きることを意味を模索し続ける姿は、科学技術が進み世界がより密接になろうとも変わらず、普遍的な人間そのものの姿です。ベケット自身、この『エンドゲーム』を「自分の作品の中で最も嫌いじゃない作品」と評したとされています。

また、私が特に心に残っているベケットの言葉に「Try again. Fail again. Fail better.」というものがあります。冷徹に見える現実の中に人間的な温もりが宿っているベケットの考え方に希望を感じます。失敗を繰り返し、終わりに近づく中であって「どう終わりを迎えるか」あるいは「どうやって終わらせないか」という問いを絶えず問い続けること。この作品を通じて、生きる意義を「問い続ける姿勢」こそが人間の希望であることを描ければと考えております。

## **[作] サミュエル・ベケット Samuel BECKETT**

1906年4月13日-1989年12月22日。アイルランド出身の劇作家、小説家。27年、ダブリンのトリニティ・カレッジを首席で卒業。28年にパリ高等師範学校に英語講師として赴任し、ジェイムズ・ジョイスと知り合う。ダブリンやロンドンでの生活を経て、37年の終わりにパリに正式に移住し、マルセル・デュシャンと出会う。ナチス占領下には、英国特殊作戦執行部の一員としてレジスタンス運動に参加。『モロイ』『マロウンは死ぬ』『名づけえぬもの』の小説三部作を手がけるかたわら、52年には『ゴドーを待ちながら』を刊行(53年に初演)。ヌーヴォー・ロマンの先駆者、アンチ・テアトルの旗手として活躍し、69年にノーベル文学賞を受賞。ポストモダンな孤独とブラックユーモアを追究しつづけ、70年代にはポール・オースターとも交流。晩年まで、ミニマル・ミュージックさながらの書法で、ラジオ・テレビドラマなど数多くを執筆。



## **[翻訳] 岡室美奈子 OKAMURO Minako**

早稲田大学文学学術院教授、早稲田大学演劇博物館前館長。文学博士。専門は現代演劇論、テレビドラマ論、サミュエル・ベケット論。著書に『テレビドラマは時代を映す』(ハヤカワ新書)、共編著書『サミュエル・ベケット! — 新しい批評』(水声社)、『ベケットを見る八つの方法: 批評のボーダレス』(水声社)、『ベケット大全』(白水社)、Borderless Beckett / Beckett sans frontières, Samuel Beckett Today / Aujourd'hui 19 (Rodopi)、Ireland on Stage: Beckett and After (Carysfort Press)など、訳書に『新訳ベケット戯曲全集1 ゴドーを待ちながら/エンドゲーム』(白水社)など、共訳書に『ベケット伝』(白水社)などがある。



## **[演出] 小川絵梨子 OGAWA Eriko**

2004年、ニューヨーク・アクターズスタジオ大学院演出部卒業。06~07年、平成17年度文化庁新進芸術家海外研修制度研修生。18年9月より新国立劇場の演劇芸術監督に就任。近年の演出作品に『エクウス』『ヴォイツェック』『ART』『おやすみ、お母さん』『管理人/ THE CARETAKER』『ダウト~疑いについての寓話』『検察側の証人』『ほんとうのハウンド警部』『死と乙女』『熱帯樹』『出口なし』『FUN HOME』『死の舞踏/令嬢ジュリー』『RED』など。新国立劇場では『ピローマン』『デカローグ』『レオポルトシュタット』『アンチポデス』『キネマの天地』『タージマハルの衛兵』『骨と十字架』『スカイライト』『1984』『マリアの首-幻に長崎を想う曲-』『星ノ数ホド』『OPUS/作品』の演出のほか、『東京ローズ』『かもめ』『ウィンズロウ・ボーイ』の翻訳も手掛けた。

## 出演者プロフィール



### 近江谷太朗 OUMIYA Taro ————— ハム

劇団スーパー・エキセントリック・シアター (SET) 研究所を経て、1989年に演劇集団キャラメルボックスへ入団。主力メンバーとして2002年の退団まで所属した。これまでの主な出演に、映画『リポートメンー眠らぬ街のコンカフェ探偵』『威風堂々～奨学金って言い方やめてもらっていいですか?～』『オジキタザワ』、テレビドラマ『大追跡～警視庁SSBC強行犯係～』『プライベートバンカー』『モンスター』、コンサート『角松敏生 Performance 2024 “C.U.M” vol.1』などがある。

【主な舞台】『生きないーケシの花に囲まれてー』『ミスター・ムーンライト』『絡み合う正義』『フットボールの時間』『更地 SELECT～SAKURA VII』『幸福論』『恥ずかしくない人生』『キョウカイセン』『誰かが彼女を知っている』『ナミヤ雑貨店の奇蹟』『照くん、カミってる！～宇曾月家の一族殺人事件～』『陽だまりの樹』『あたっくNO.1』『エール』『東京少年少女』『フィクション』『熱海殺人事件～友よ、いま君は風に吹かれて～』など。



### 佐藤直子 SATO Naoko ————— ネル

1988年、演劇集団円演劇研究所入所し91年に劇団員に昇格。2008年の退所後は、舞台を中心に、映像作品にも多数出演。主な出演に映画『シサム』『サイレントラブ』『コーヒーが冷めないうちに』『葛城事件』『クリーピー 偽りの隣人』『悼む人』『紙の月』『たみおのしあわせ』『ぐるりのこと。』『ハッシュ！』『八つ墓村』、テレビドラマ『9ボーダー』『マイ・セカンド・アオハル』『黒鳥の湖』『にぶんのいち夫婦』などがある。

【主な舞台】『カタバイ、2025』『帰れない男～慰留と斡旋の攻防～』『蜘蛛巣城』『青空は後悔の証』『ヘッダ・ガブラー』『浮標』『鼯-いたち-』『鎌塚氏、放り投げる』『jam』『更地』『三人の女』『羊と兵隊』『恋する妊婦』『アイスクリームマン』『西へ行く女』など。



### 田中英樹 TANAKA Hideki ————— ナツグ

2001年、劇団テアトル・エコーに入団。プロダクション・テアトル・エコー所属。04年に日本版『セサミストリート』のオーディションに合格し、パペティア(パペットの声と操演)として活躍。現在は舞台を中心に、吹き替え、テレビドラマ、朗読など多方面で活動中。主な出演にテレビドラマ『あなたを奪ったその日から』『ラーメン大好き小泉さん』『世にも奇妙な物語 '13春の特別編』、『呪web』、吹き替えに映画『シンデレラ(15)』『塔の上のラプンツェル』『モンスターズ・インク』、海外ドラマ『デスパレートな妻たち』『ドレイク&ジョシュ』、ゲーム『バイオハザード RE:2』などがある。

【主な舞台】『11ぴきのネコ』『大正パンデミック』『ママごと』『人魚姫』『太陽の棘』『泣いた赤鬼』『カレンダー・ガールズ』『淑女はここにいる』『フレディ』『雨』『病は気から』など。



### 中山求一郎 NAKAYAMA Kyuichiro ————— クロヴ

大学在学中、映画『恋人たち』のワークショップ・オーディションを受け、2015年に同作でデビュー。以降、舞台や映像作品など幅広く活動している。これまでの主な出演に映画『蟲』『愛に乱暴』『あんのこと』、テレビドラマ『シナントロップ』『異人アンドロ氏』『花咲舞が黙ってない』『厨房のありす』などがある。

【主な舞台】『勝手に唾が出てくる甘さ』『センスセンスセンス・オブ・ワンダー』『ドードーが落下する』『らんぼうものめ』『話してくれ、雨のように』『裏切りの街』『ワクチンの夜』『ダニーと紺碧の海』『ルーツ』など。

## 公演概要

### いま、ここに——[2]『エンドゲーム』

【作】サミュエル・ベケット

【翻訳】岡室美奈子

【演出】小川絵梨子

【美術】小倉奈穂

【照明】原田飛鳥

【音響】竹田 雄

【衣裳】前田文子

【ヘアメイク】高村マドカ

【演出助手】渡邊千穂

【舞台監督】梅畑千春

【主催】新国立劇場

【キャスト】近江谷太朗、佐藤直子、田中英樹、中山求一郎

#### 【公演日程】

2026年5月20日(水)～31日(日)

プレビュー公演: 2026年5月15日(金)・16日(土)

【会場】新国立劇場 小劇場

#### 【料金(税込)】

A席 7,700円／B席 3,300円／Z席(当日)1,650円

プレビュー公演: A席 5,500円／B席 2,200円／Z席(当日)1,650円

【一般発売】2026年3月20日(金・祝)10:00～

#### 【チケット申し込み・お問い合わせ】

新国立劇場ボックスオフィス TEL: 03-5352-9999 (10:00～18:00)

新国立劇場Webボックスオフィス <https://nntt.pia.jp/>

\* **Z席1,650円** Z席は、公演当日朝10:00から、新国立劇場Webボックスオフィスおよびセブン-イレブンの端末操作により全席先着販売いたします。先着販売後、残席がある場合は、公演当日朝11:00からボックスオフィス窓口でも販売いたします。※電話予約不可。

\* **当日学生割引** 公演当日残席がある場合、Z席を除く全ての席種について50%割引にて販売。要学生証。電話予約可。

\* **各種割引** 新国立劇場では、高齢者割引(65歳以上5%)、障がい者割引(20%)、学生割引(5%)、ジュニア割引(小中学生20%)、アトレ会員割引(5～10%)など各種の割引サービスをご用意しています。

いま、ここに——[1]『ガールズ&ボーイズ』



【公演日程】2026年4月9日(木)～26日(日)  
【会場】新国立劇場 小劇場  
【作】デニス・ケリー 【翻訳】小田島創志 【演出】稲葉賀恵  
【出演】真飛 聖／増岡裕子 (Wキャスト)

**ものがたり**

人生、どうすればいいか分からなくなった。このままじゃだめだって思って。だから、一人で旅に出たの。そしたら、イタリアの空港で彼に出会った。まるで映画みたいに。恋に落ちて、結婚して、二人の子どもも生まれて、仕事だって順調で.....すべてがうまく転がっていく気がしてた。だけど、ほんのちょっとしたことで、少しずつズレ始めて。気づいたときには——もう戻れない場所にいた。これは、そんな「わたし」の話。

いま、ここに——[3]『りんごが落ちる』



【公演日程】2026年6月13日(土)～28日(日)  
【会場】新国立劇場 小劇場  
【作】ノエ征爾 【演出】金澤菜乃英  
【出演】浜田 学、山口森広、梅舟惟永、宮川安利、大西多摩恵

**ものがたり**

台所に一人立つ男。ベテラン舞台俳優の田端光太郎。1時間前、彼は舞台上にいた。近年仕事が減る中、徐々に舞台の主役が巡ってきた。迎えた初日。セリフが止まった。ラスト10分が沈黙劇となった。田端は今、台所に立ち、料理をしている。二人暮らしの小学生の息子は合宿で不在だ。そこへ、学生時代の後輩・猿橋が。この舞台の若い演出家・鴨川が。お隣の婦人・鶴野が。それぞれの事情で訪ねてくる。そして地元で働く妹・夢子からは、何度も気遣いの連絡がくる。行き詰まり、息が詰まっているアンバランスな人々の、ズレた思いやりと身勝手が錯綜する。田端は果たして、本当にセリフを忘れたのか？ 明日セリフは言えるのか？ それぞれの人生で止まっているセリフたちが動き出す。りんごが落ちる。誰が拾う。